

氏名	飯沼春子
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第264号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉禅林寺蔵重要文化財「二十五菩薩来迎図絵扉」－厨子形式－ 〈論文〉禅林寺蔵重要文化財「二十五菩薩来迎図絵扉」における表現効果の研究－想定復元模写をとおして－
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 宮廻正明
（論文第1副査）	〃 客員教授（〃） 有賀祥隆
（作品第1副査）	〃 教授（〃） 田淵俊夫
（副査）	〃 〃（〃） 藪内佐斗司

（論文内容の要旨）

〈原本作品説明〉

本作品は、12枚の板絵着色作品の厨子扉絵で、現在は大阪市立美術館と京都国立博物館に6枚ずつ分割寄託された重要文化財指定作品である。14世紀、鎌倉期、中国浄土教の弘通者善導大師像を祀るために制作されたといわれるが、表面は退色や汚れが著しいうえ、詳しい研究はなされていない。

扉絵は、2枚1組で2組ずつ正面扉4枚、側面扉4枚ずつで計12枚からなる。この中で、菩薩は11面に2体ずつ、残る1面には3体が描かれ、それぞれ異なった雲に乗っている。また、ここには阿弥陀如来も往生者も描かれず、空中に化仏が現前し、楽器は自由に飛び交うといった点が特徴的である。

〈研究目的〉

本作品を実際に見ると、濃彩、盛り上げ技法、そして截金といった高度な絵画技法が、ふんだんに採用されていることが分かる。それは、他の多くの扉絵とは違って、本作品が単なる本尊荘厳だけでなく、礼拝者へ向けた特別な表現効果を考慮して制作されたためではないかと考えられる。そこで「本作品では、礼拝者への表現効果を高めるべく、制作者が意図的に、盛り上げなどの様々な絵画技法を用いていた」という仮説を立てて、研究を行ってきた

2005年に筆者が行った作品一部の現状模写では、経年による塵や埃、燻染で黒変している為、本来の表現効果までを窺い知ることができなかった。そのため本研究では、板絵の12枚を同時に見られるようにし、さらに厨子の状態まで想定復元することで、この仮説を証明しようと試みた。

〈研究内容概略〉

① 調査

本研究において必要な以下の調査を行った。

1. 目視調査
2. 光学的調査（赤外線撮影・斜光撮影・接写撮影）
3. 科学的調査（蛍光X線分析・高倍率マイクロスコープ）

目視の調査では、黒変が甚だしく詳細の分析は不可能であった。そこで光学的調査の赤外線撮影では、

下図に描かれている墨線や描き起こしの墨線を読み取ることができた。さらに科学的調査の蛍光X線分析によって、原本から色料の元素を想定した。また高倍率マイクロスコープを使って拡大観察したことで、色味の系統と粒子の大きさが見て取れた。これらの情報を合わせることで、本作品に使われていたであろう、おおよその色料と顔料を想定することができた。

② 彩色技法の想定

調査、分析、美術史の観点からの情報、そして類似作品等やサンプル作成したものを参考にした。中でも非常に困難であったことは、配色及び色のバランスであった。さらに截金を施した後に下地の色料が変化するため、塗り直しを幾度も行う必要があった。こうして最も適切だと思われる下地、盛り上げ彩色、彩色の配色、截金、図様を一つ一つ想定した。

③ 想定復元模写制作

これまで実施した数々の調査及び想定から得られた結果に基づき、本作品で用いられている濃彩技法・盛り上げ技法・截金の表現効果を実証すべく、本作品の想定復元模写制作を行った。

まず、原本と同じ寸法の檜の正目の板を12枚用意し、今までの調査・想定を考慮し想定復元した。とくに画面の大部分を占める虚空と来迎雲、光輝表現がなされた截金と光背においては、様々な工夫がなされていたことを理解し制作することができた。

次に、本作品の当初の形態が厨子であることから、描画完成後、厨子に組み込んだ。これにより、可能な限り当初の形態に近いかたちの想定復元模写となったといえる。

〈総括〉

想定復元模写制作を通して、現在は分割寄託された原本を12枚同時に見られるようにし、さらに作成当初の形態であるとされる厨子の形態にまで復元して、扉絵本来の姿を取り戻すことができた。

結果、本作品に用いられている優れた技法は、扉絵が開かれた状態で光が当たった際に、濃彩技法は絵画の奥行き感と空間性を表現していたこと、盛り上げ技法は立体感を表現していたこと、そして截金は光そのものを絵画の一部に取り込み、光輝表現する目的で用いられていたことを確信した。

すなわち、それらの技法は、本来の扉絵が持つ荘厳性だけではなく、礼拝者がその表現を最も効果的に感じられるようにする目的で、制作者たちが意図して用いたものであると言えることが、本研究を通じて証明することができた。

また、本研究では、板絵作品だけを平面的に分析するのではなく、厨子のかたちを立体的に復元して考察したことで、礼拝者側に立った視点のありかたを示すことが可能になった。これは、厨子を含めた鎌倉期美術史・工芸史の研究においても、新たな視点を提供することにもなるであろう。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、鎌倉時代後期に制作された京都・禅林寺所蔵の「二十五菩薩来迎絵扉」12枚（2枚1組で6組）が、現在、厨子から外され、12枚の板絵として別置保存されているのに対して、とくに板絵の賦彩が濃彩・盛上彩色と、加えて細密な截金文様が施されていることに注目し、制作当初の扉絵を想定復元し、厨子に嵌めて光の影響による表現効果を実証すべく論述したものである。

本論文は、I章・研究概要、II章・現状調査、III章・科学的研究、IV章・彩色技法・厨子の想定、V章・想定復元模写制作、VI章・結論の6章からなる。論述の中では、注目される盛り上げ彩色については、雲などの表現では手前と奥の雲では盛り上げの厚みを調整し、薄いところで2回からほとんどが5、6回重ね塗りして盛り上げ、厚みのあるところは7、8回塗り重ね、画面が扉絵として直立し、光が当

った時に、立体的な雲を感じさせる効果があることなどの論述をはじめ、想定復元の制作に際して、下地や図様の確定、彩色の同定などを目視調査や科学的調査をして類似作品と比較検討し、サンプルを作り検証して決定する過程を順序立てて論述するなど、本論文はきわめて実証的で客観性に富み高く評価される。

なお、附記すべきは論文の論述だけでは分からない盛り上げ彩色や濃彩、截金文様の効果が、実際に厨子を作り、想定復元した扉絵を嵌めて、光を当て実証されたことである。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、大阪市立美術館と京都国立博物館に分かれて寄託所蔵される「二十五菩薩来迎図絵扉」の推定復元模写である。

修士課程在籍時に一部の現状模写を行ったが、経年による煤や煙、燻染によって黒く変色しており、本来の色彩はうかがい知ることができない状態であった。しかし模写をしたからこそ分かるその芸術性の高さ、価値を具現化するべく制作当初の姿を、本来納まっていたであろう厨子の形体をも含めて提示することを試みようとした。また厨子に濃彩技法や盛り上げ技法が多用される点に着目し、その表現効果までも究明しようと作業を進めていることが再現研究に深みを与えている。

その手順は徹底的な目視調査から始まり、斜光撮影や赤外線写真撮影、蛍光X線撮影、高倍率デジタルマイクロスコープ分析結果、美術史的知見、サンプル実験結果等の客観的な判断のもとに図様・彩色・制作技法の推定を行っている。

博士審査展では濃彩技法や盛り上げ技法の効果を実証するために、照明方法にも独自の工夫を凝らした。絵扉として直立した画面に当たる光は、盛り上げ技法によって描かれた雲を立体的に浮かび上がらせ、奥行きある空間を作り出した。そして当時貴重であったと考えられる群青や緑青がたつぷりと塗布され、重厚かつ荘厳な雰囲気が見る者の感覚を大いに刺激した。

本研究は日本画家としての経験による技術・感覚は勿論のこと、截金技法という高度な専門的技術を身につけた立場から探究している点でも注目を集めた。その精緻な截金表現の再現は余人をもって代えがたいといえ、またその技術の保持に強い責務も感じられる。推定復元模写は今後の截金研究の指標となり得る芸術性高い作品という点でも認められ、棚上げとなっていた美術史研究の分野に一翼を担うものと確信する。よって審査員全員の高い評価のもと、見事合格となった。

(総合審査結果の要旨)

禅林寺蔵 重要文化財「二十五菩薩来迎図絵扉」は厨子扉絵として描かれたものだが、現在では厨子は損失し扉絵のみが大阪市立美術館と京都国立博物館に6枚ずつ分割して寄託されている。そのため扉絵として描かれた位置関係や彩色技法の効果が、現状のままでは明確に解明できないままできた。そこで本作品において多用されている、濃彩、盛り上げ、截金等の絵画技法が、荘厳さだけでなく礼拝者への特別な効果を考慮して制作したのではないかという仮説を立てて、複合的見地から研究をおこなった。そして、想定復元模写をとおして実証を試みた。

所有者であるお寺側の許可を取り、何度も大阪市立美術館と京都国立博物館に調査に出向き、目視調査、光学的調査、科学的調査を繰り返した。また、原本と同寸法の正目の檜材を使用し、描かれた当初の高度の技法を、類似作品の研究や試作により幾度となく繰り返した。下地、盛り上げ、配色、截金、図様が限りなく当初の形態に近い状態に再現出来た。その結果、光そのものを絵画に取り込み、立体感を表し、宗教上最も優れた空間を表現することを実証してみせた。本論文においてもこれらの経緯や工程が的確に述べられており、今後の鎌倉期の厨子絵並びに美術史・工藝史を研究する上でも貴重な資料

を提供するものである。また、その総合的な研究は、今までにない新しい研究成果であり高く評価されるものである。